子どもと養育者の関係と「抱える環境」の機能について
映画を通して

恒吉　徹三

Relationship of Children and Caregiver and the Function of the Holding Environment
Through the cinema

TSUNEYOSHI Tetsuzo
（Received December 15, 2021）

キーワード：子どもと養育者、抱える環境、映画

はじめに

子どもが子どもらしくいられるためには、Winnicott（1965/1977）がいうように「抱える環境」が必要だと考えられる。ところが、現代の日本では７人に１人の子どもが貧困状態に陥っており、この割合からすると35人学級であれば５人が貧困状態にあることになる。かなり身近な問題である。さらに、2020年度の児童相談所の虐待相談対応件数は205,044件であり（厚生労働省，2021）、子どもを抱える環境には、かなりの機能不全が生じていると言っても過言ではないだろう。つまり、抱える環境という観点から考えると、大人や社会の問題が、子どもを取り巻く人的・物的環境の問題として表現されているといえる。

本稿では、子どもと養育者の関係や、子どもを抱える環境について映画を素材として検討する。ここでいう「抱える環境」とは、発達の初期には、子どもが心地よく過ごすことができるような場所を確保したり、確保した部屋の温度を調整したりするなど、物理的にも配慮をしてくれる養育者や大人の関わりのことである。このような抱える環境があって初めて、子どもが必要としている対人的な関わりも提供することができる。たとえば、話しかけること、不快な気持ちを汲み取ること、よろこびを共有すること、など他者との関わりの側面が成立するものとして考えられている。ウィニコットの理論では、抱える環境は、いわば母親（養育者）の腕の役割として説明されており、抱き抱える、ということがあって子どもと養育者の関わりが成立していると理解されるのであるが、この抱き抱える腕の役割について着目した点で貴重な理論であることが指摘されている。

それでは、以下に映画を素材として検討する。映画は、人間関係について具体的に描いており、虚構として構成されているものであっても、人と人との関係を理解するには貴重な素材であると考えて検討する素材として用いる。その際、一部に結末の記述を含むもの、いわゆるネタバレしている部分もあることから、先に映画を観てから読んで頂くことをお勧めしたい。

１．『あの日のオルガン』（2018）：混乱した状況の中での抱える環境

この作品は、平松恵美子監督・脚本で、1940年代の第二次世界大戦中の実話に基づいた映画である。

１－１　映画の基本情報

監督・脚本：平松恵美子、配給：マンシーズエンターテインメント、出演（役名）：戸田恵梨香（板倉楓：主任保育士）、大原櫻子（野々宮光枝：新人保育士）、奥村佳恵（疎開保育園・賄い担当）、田中直樹（保育所・所長）、橋爪功（近藤作太郎：南埼玉郡平野村世話役）、萩原利久（近藤信次：朔太郎の次男）原作：久保つぎこ、ほか。

１－２ 映画のあらすじ

東京にある戸越保育所は、空襲の被害から園児たちを守るために、「公立保育所より七か月も先立って、幼児集団疎開を単独決行。」（キネマ旬報社，2019）するという独自の判断で保育所を疎開させ、日本で初めての「疎開保育所」を埼玉県内に作る。そのために、保護者の理解を得るよう園は説明を行い、所長が疎開先を開拓し、廃墟になっていた寺を借りて保育士が協力して保育所にする。ところが、周囲の住民からは子どもたちの食糧をめぐっても冷たい視線を向けられ、村の世話役が間を取りなしても保育士と村人との間にも軋轢が生じる。

このような保育所とその周囲の人々との関係の問題が生じていて、保育士は、保護者からの分離で夜尿が増える子どもたちに添い寝することで安心感を提供し、オルガンを弾いて歌い、野山を散策するなど、保育をおこなっていく。戦争が終わると、疎開保育所は役割を終えて、それぞれの保護者のもとに子どもたちも帰っていく。保護者と死別した子どもも引き取り手を得ることによって保育所から去っていく。

１－３ 重層的な抱える環境

この映画から理解できることは、実話に基づいていることもあり、戦争により物理的には抱える環境が多くの場所で破綻している中にあっても、大人たち、とりわけ子どもを育てる専門家の発想や工夫が、子どもたちをより安全に、そして他者との関わりの中で抱えることが可能であることを示している。ただ、この映画が示しているのは、子どものそばにいる大人だけではなく、さらにその周囲の大人たちの理解がなければ、必要な環境を維持できないことを示している。つまり、子どもが抱える環境の中心にいるとして、そのすぐそばに保育士や調理や布団を干したり洗濯したりするなど園の運営を補助してくれる身近な人たち、その園の中にいる子どもや保育士などが過ごす疎開保育園（元はお寺）と園の外と内を分ける塀に囲まれた敷地、その敷地の外側にあって保育園を取り巻いている村と村の住人、さらに、この村を取り囲む自然環境というように、重層的であることがより十分な環境を提供できることを示している。このような環境を重層的な抱える環境と呼ぶことにする。この重層的な抱える環境により、戦時下であっても、通常通りとはいかないまでも保育士が弾くオルガンに合わせて子どもたちが歌ったり、周囲の野山へ出かけたて遊んだり、同年齢の子どもたちとの関わりを広げることもできることが示されている。とはいえ、開設当初から村人全員が好意的であるわけではなく、度重なるトラブルの度に話し合いを行いながら少しずつ整ったものである。長谷（2007）は、児童自立支援施設での心理療法（心理面接）事例を通して、心理療法という抱える環境の外側に、さらに、児童自立支援施設やその場での生活という抱える環境という、2つの抱える環境が同心円上になっており、二重構造であることについて指摘している。しかしながら、ここで取り上げた映画を踏まえると、子ども、養育者、家庭、学校、地域社会、より外側の社会といったように、子ども抱える環境は、より多層的なモデルとしてとらえることができる。

この点からすると、「はじめに」で述べたように、虐待や貧困が身近にあるからといって、全ての子どもたちの抱える環境が失われて不安にさらされているわけでもない。もちろん子どもの家庭環境の違いによって必要な環境が得られないことは子どもの発達を考える上では大きな問題である。当然のことながら、社会的な点から貧困は避けるべき事態でもある。それでも、貧困の最中でも、保護者が可能な限りに安心や安全や必要な関わりを提供できれば、子どもたちがのびやかに育つ可能性を広げることはできる。しかしながら、これは個人の努力ではなく、子どもやその養育者を取り巻く環境が、子どもや養育者にとっての抱える環境になっているか否かによるものだと理解できる。貧困から食糧はおろか住む場所も無い中では、周囲からも切り離されてしまい、子どもに必要なものを提供することは、かなり困難なことだと考えられる。その意味では、子どもへの支援だけでなく大人への支援も必要とされている。戦時中でもない現在の日本において、新型コロナウイルス感染症の拡大により、仕事そのものがないために職場から解雇された人たちが、食糧をもらうために列を成している現状である。例えば、東京都内で無料での炊き出し支援を行っている特定非営利活動法人TENOHASHI（2021）の活動報告書によると、2021年11月には活動開始以来最多の472人がこの支援を受けている。20代から30代の若者が並んでいるのが当たり前になり、さらに女性も以前はほとんどいなかったのに１割程度いることや、親子連れが並ぶことも珍しくないほどだと述べている。この点からも、社会が子どもと関わる人たちにとっての抱える環境として、どの程度機能しているかが問われている状況とも言える。もちろんこのことは、一部の地域の一部の人だけのことではないかという反論もあるだろう。この点では、全国的な実態把握のための十分な統計報告がなされることを期待したい。

２．『存在のない子供たち』（2018）：子どもが子どもでいられない環境と子どもの異議申し立て

２－１ 映画の基本情報

監督・脚本：ナディーン・バラキ、配給：キノフィルムズ、出演（役名）：ゼイン・アル・ラフィーア（ゼイン）、シドラ・イザーム（ゼインの妹サハル）、カウサル・アル・ハッダード（スアード：ゼインの母親）、ファーディー・カーメル・ユーセフ（セリーム：ゼインの父親）、ヨルダノス・シフェラウ（ティゲスト・アイロ：ゼインが出会った、アルバイトしながら乳児を育てる女性）、ボルワティフ・トレジャー・バンコレ（ヨナス：ヨルダノスの息子）、アラーア・シュシュニーヤ（アプロス：人身売買の仲介人）ほか。

２－２ あらすじ

レバノン共和国の首都ベイルートを舞台にした物語である。主人公の12歳のゼインは、両親が出生届も出していないために公的には存在していない子どもである。さらには、廃品回収をしたり、飲み物を路上で売ったりして、妹たちとお金を稼いでそのお金は家に入れている。そんなある日、11歳になった妹のサハルが無理やり結婚させられる。この結婚に抗うにも子どもにそれだけの力はなく、妹は結婚させられ、どうすることもできなかったゼインは一人で家出する。家出して放浪するうち、子どもを抱えながら働く移民の女性ティゲストと知り合って、ティゲストの家に住まわせてもらうことになる。その代わりに、ティゲストが働いている間、彼女の子どもにミルクを飲ませるなどいわばベビーシッターをすることになる。ところが、この母親が逮捕され、突然帰って来なくなる。状況もわからないゼインは途方にくれる。住まわせてもらっていた小屋のような家からも、大家から締め出されて住むところもなくなる。そして、最後はゼインも移民のティゲストと同じところに収容され、家に帰されることになる。家に帰ると、結婚した妹が死んだと知る。そしてゼインは、自分を産んだ罪で両親を告訴する。

２－３ 抱える環境の破綻に対する子どもからの異議申し立て

ゼインの生きる環境には、両親はいても抱える環境がなく、労働を強いられ、大好きな妹を両親によって無理に結婚させられ引き離された挙句に妹は死に至る。映画の中には、妹や、親が働く間に面倒を見ている子どもたちに関わる主人公の姿が描かれている。ところが、妹が死に至る、という出来事をきっかけに両親を12歳のゼインが自分を産んだ罪で告訴する。これは、子どもが生きる環境としてはいかに過酷であるかを表明するための、親というより大人や社会への異議申し立てであると理解できる。国もその国の環境も日本とは大きく異なる点を差し引いても、子どもによる異議申し立てができるとすると、日本でも多くの子どもたちによる異議申し立てはなされるであろう。ところで、Overmier & Seligman(1967)が、古典的条件づけのように明確な恐怖によって逃げられなくなるわけでもなく、また24時間以上の持続性もあるという、従来とは異なる結果を得て、“learned helplessness”と名付けた概念がある。「学習性無力感」と訳されており、環境や大人たちによって子どもが無力感を抱かされると、自ら主体として動くことは難しいという意味でもある。その意味でも、学習性無力感という日本語表現は十分ではない。むしろ、環境ないし他者から「押し付けられた無力感」と概念化する必要がある。学習性無力感という概念では、まるで個人が勝手に無力になったかのような誤解を招きかねない。これは、用語としても関係論的な概念ではなく、いわば、一者心理学的に心をとらえようとする発想に基づく概念化の弊害だといえる。

環境からすると無力感に苛まれてしまいそうな状況であっても、この映画の主人公ゼインは、年下の妹たちの面倒を見て、妹に結婚を無理強いする両親の意向にも抗って妹を逃そうともする。この映画には、子どもであっても、大人や社会環境への異議申し立てをする力のあること、追い詰められた状況でも他者への配慮ができることなど、子どもの強さを描いている一面がある。つまり、抱える環境の中での守られる存在であるとともに、一方では、自ら主張する存在でもあることを示している。とはいえ、なぜ、両親を告訴するまでに至ったのかを考えると、抱える環境の破綻があり、強くあらねばならない環境の中にいること、子どもが子どもらしくいられない環境という、大人が子どもに必要な養育を提供していないという問題が背景にあることが理解できる。

３．『リトル・ガール』（2020）：子どもを抱える環境としての地域社会・学校

この映画は、生まれた時には男の子と判断されたが、その後、自分は女の子だと性自認している子どもとその家族についてのフランスのドキュメンタリー映画である。

３－１ 映画の基本情報

監督・脚本：セバスチャン・リフシッツ、配給：サンリスフィルム、出演：サシャ（本人）、サシャの両親と兄・妹、ほか。原題：Petite Fille、英題：Little Girl。

３－２　映画のあらすじ

主人公のサシャは、生まれた時は男の子だと判断されたが、自分は女の子だと思っていることを母親にも打ち明けたが、母親は初めは受け入れられなかった。それでも、サシャが７歳の時には、サシャの気持ちを受け入れて医師に相談し専門の児童精神科医を紹介される。この専門医から、性別がまだ確定できるわけではないことから、将来どちらにもなりうることを踏まえて、ホルモン療法を始めるかどうか考えること、また、始めた場合でも止めることができることなど説明を受ける。ところが、学校はサシャが女の子として過ごすことを認めていないので、母親は医師に意見書を書いてもらい、学校に出す。医師がサシャの住む街に出向いて説明をすることになり、サシャが同席を希望した友だちの保護者や地域の人たちも立ち合い、話し合いがもたれた。母親は学校にも同席を求めたが学校からは誰も出席しなかった。サシャも家族も転校したくないと言っていたが、学校が受け入れるかどうかは新学期が近づいてもなかなか決定がなされなかった。さらに専門医への受診は続いて、両親とサシャ、兄らは同席で医師の説明を受ける。医師は、母親や父親など大人に説明するのではなく、サシャ本人に十分に説明する。そして医師は、ホルモン療法を受けるかどうかは、最後はサシャ自身が決断することだと改めて伝える。

一方、通っているバレエ教室でも初めは男の子として扱われて、自宅では、サシャが欲しいというワンピースや水着を買ってもらう。

また、サシャの姉、兄の二人もサシャの気持ちを受け入れようとしており、姉は自分が女性としてのモデルになると言い、兄は友だちにどんなふうに紹介したらいいのかと悩んでおり、医師は、自分の妹だと紹介したらよいと助言する。このように、家族全員がサシャの望む方向で関わろうとしている。

３－３　子どもを抱える環境としての地域社会・学校

この映画を観ることで、自らの性別に違和感を持つ子どもやその家族、さらに学校や社会のありようについて考える機会を得ることはできる。サシャは、すでに3、4歳の幼児期から自己の性別に違和感を感じていたと述べており、７歳になって専門医を受診し、この違和感をより自分の感覚に沿って生きるよう家族も理解し学校や地域など周囲に働きける。そして、サシャが女の子として生きていけるように環境を整えていく。ところが、フランスの学校でさえ、自己の性別に違和感のある児童を受け入れることが当然視されているわけではない一面も描かれている。これはサシャが通う学校だけのことであるのかありふれたことなのかは判断できない。吉田・森山（2018）は、2017年に南仏プロバンスにある病院の児童精神医学教室と、開業している臨床心理士を訪問し、児童精神医学領域の医療や精神療法の状況を報告している。この報告によると、臨床心理士が開業している人口約2.2万人のマノスク市には、22人の臨床心理士と３人の精神科医がおり、およそ1,000人強に一人の割合で精神療法家がいると述べている。そこで、日本の人口（2021年８月１日現在で1億2563万3千人）と臨床心理士（2021年4月1日までの総認定者数38,397人）の数を比較してみると、1,000人あたり0.3人である。地域状況を踏まえていない比較であるが、日本の約3.3倍である。さらに報告では、フランスの精神科医療領域の予算は削減されているため、臨床心理士が医師の指示を受けない「自由診療」で、精神科医の仕事を補うほどに発展していることも指摘している。このような精神医療の広がりの点からしても、学校との連携も不十分とは考えにくいが断定もできない。それでも、家族が理解し、サシャ本人が自分を理解してくれている友だちやその保護者など、一部の人たちは医師が同席しての母親の説明を聞いてサシャを理解しようとする。このようにして、少なくともサシャにとっての身近な抱える環境は機能し始める。それに、たとえ７歳の子どもであっても、自分自身についての決断を医師は迫る。この点では、日本とは異なる文化差を抜きに理解できないことを実感するが、個を尊重する姿勢としては学ぶ点がある。

しかしながら、当事者やその家族をスクリーンに映し出すことのマイナス面いわば加害性について、児玉（2021）は、サシャが女性だと現在は自認しており、この先も女性として生きているのかはわからない点はあるとしても、「サシャがこの先も女性として生きていくとき、そこにはただ女性として生きていく選択もあったかもしれないが、映画自体がすでにカムアウトの機能を果たしているために、サシャはトランス女性として生きることを半ば余儀なくされた。」と指摘している。女性として生きられる可能性のあったこと、場合によっては、男性として生きる可能性もあることも含めて、この映画は、観客を前にカミングアウトさせたと指摘しているのであり、その場面に観客として居合わせたのである。「この一本の映画がサシャ自身、そしてサシャの人生に何をもたらしゆくのかを、スクリーンが暗転した後も、わたしたちはなお、見つめ続けていく必要があるだろう。」とさらに児玉（2021）は観客にも問いかける。言い換えるなら、観客は、サシャを始め、自らの性別やセクシャリティに違和感を持つ子どもたちや人々を、自分らしくいられるための抱える環境としての役割を果たすよう求められている。発達の途上にいる子どもを描いた映画を観ることは、時に大人として相応の責任を負う覚悟の有無が問われているということである。実際、教育場面で期待されている最低限のことはすでに示されている。たとえば、文部科学省（2015）は、『性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について』により、性同一性障害並びに性的マイノリティとされる児童や生徒に対する具体的配慮について各学校（私学並びに大学附属学校を含む）に適切な対応をするよう求めている。さらに、文部科学省（2016）は、『性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）』を発行し、各学校での取り組みの現状を示した上で、より具体的な配慮の必要性を示している。少なくともこのような理解や対応は、たとえこの映画を観ていないとしても、教育に関わる大人には最低限のこととして求められていると言える。

４．『真夜中の５分前』：幼児期の人間関係の重要性

４－１ 映画の基本情報

監督：行定勲、脚本：堀泉杏、配給：東映、出演（役名）：三浦春馬（良）、リウ・シーシー（ルオランとルーメイの二役：双子の姉妹）、チャン・シャオチュアン（ティエルン：ルーメイの婚約者）、原作：本多孝好、ほか。

４－２ 映画のあらすじ

上海に住むルオランとルーメイは一卵性の双子の姉妹で、まだ幼い子どもの頃、赤い服を着たルーメイは、自分の家の窓ガラスに石を投げるいたずらをして、姉のルオランの着ている黒い服を貸りて入れ替わる。そこに、いたずらを叱りにきた家政婦の女性が、服の色から、自分ではないと訴えているのにルオランの手を引っ張って連れていく。そして後に、ルオランは、「あの日私たち、入れ替わった気がするの」と振り返って述べる。

一方、上海で時計の修理工をしている良は、仕事の後に出かけるスイミングプールで、ルオランと偶然に出会う。そして、妹の結婚祝いを選んでほしいとルオランに頼まれ、良が働いている時計店のアンティークの置き時計をプレゼントに選ぶ。このことがきっかけで、ルオランと親しくなり、妹のルーメイトその婚約者ティエルンとドライブに出かけ、ティエルンの別荘で過ごすことになる。そこで、挑発的な妹にたまりかねてルオランは良と妹とティエルンをおいて出ていく。これがきっかけで、さらにルオランと良は距離を縮める。

妹のルーメイの結婚を前に、ルオランとルーメイは、モーリシャス諸島に二人で旅行に出かける。ところが、観光で乗ったフェリーが沈没し、姉妹のうち一人だけ助かったが、それはルオランなのかルーメイなのかわからない。目を覚ました時に、ティエルンに女性が反応したことから、ルーメイだと男性二人は受け止める。そしてティエルンとルーメイは結婚するが、次第にティエルンは、結婚した女性がルーメイではなく、ルオランではないかと疑い始める。

４－３　幼児期の人間関係の反復と抱える環境の機能不全

この映画の冒頭に描かれているのは、双子の姉妹が幼児期に入れ替わって、妹のルーメイは罰を受けることを免れ、姉のルオランは受けなくてよい罰を受けることになる、という体験である。この時、ルオラン

は、窓を割ったのは自分ではないことをはっきりと述べているのに、服の色からルオランだと大人が決めつけて対応する。つまり、双子の姉妹を取り囲む大人たちは、二人の表面だけしか見ておらず、個別の一人として捉えていないことが象徴的に描かれていると考えられる。このような幼児期の大人による誤解される体験は、その後も同様に繰り返されたであろうことは想像に難くないが、映画には描かれていない。ただ、後に、ルオランは、この時の入れ替わりを、「あの日私たち、入れ替わった気がするの」と振り返って述べている。この発言をどのように理解するかには幅があるが、大人の対応は、まるで二人が入れ替わり可能な存在であるかのように扱った、ともいえる。または、入れ替わり可能だとルオランが受け止めているとも解釈できる。もちろん本当の意味で二人の人間が入れ替わることができないことから、自分の人生が自分のものでないこと、他の誰かと入れ替わり可能である、という体験だと理解できる。自分が自分として大切にされているという抱える環境が、十分に機能していないことが示されているセリフだといえる。

このような幼児期の抱える環境の機能不全は繰り返され、大人になった姉妹をより葛藤的な関係へと向かわせていったと考えられる。一人生き残った姉妹が、結婚したティエルンと両親と食事をするシーンで、ティエルンがルーメイであるのかそうでないのか父親ならわかるだろう、と迫るシーンがある。けれど、ここでの父親の対応も心もとないものである。言い換えると、双子の姉妹のどちらであっても入れ替わり可能であるかのように娘を扱っているとも理解できる場面である。このようにみてくると、幼児期にどちらの娘が窓ガラスを割る悪戯をしたのかさえ判断できなかった大人たちは、今も変わらずどちらが姉で妹なのかさえも判断できないままに、娘と関わっていると言うこともできるであろう。このような幼児期からの反復について北山（2007）は、幼児期に心に書き込まれた無意識の台本を、後になっても無意識のうちに相手を替えて反復するという劇的観点として捉えている。この観点からみると、大人になったルオランは、入れ替わり可能であるかのよう捉えるという周囲が果たした役割に呼応して、その受け手であるルオラン自身も、また入れ替わり可能であるように無意識のうちに演じているということもできる。当然のことながら、幼児期がのちの人間関係の全てを決定するわけではない。それでも、単純化してみるならば、幼児期の抱える環境の機能不全はその後も反復し、大人になった姉妹が、やがては自分で自分を抱える点での機能不全へと陥ったと理解することもできる。この反復から抜け出していくためには、ルオランがこの反復に気づくことが精神分析的観点からは期待される。

５．『マチルド、翼を広げ』（2017）：抱える環境の失敗とイマジナリー・コンパニオンの支え

５－１ 映画の基本情報

監督：ノエミ・ルヴォウスキー、脚本：ノエミ・ルヴォウスキー、フロランス・セイヴォス、TOMORROW Films./サンリス、出演（役名）：リュス・ロドリゲス（マチルド）、ノエミ・ルヴォウスキー（マチルドの母親）、マチュー・アマルリック（マチルドの父親）、ミシャ・レスコー（フクロウの声）、アナイス・ドゥムースティエ（成長したマチルド）ほか。

５－２ 映画のあらすじ

9歳のマチルドは、校庭で他の子どもたちが遊んでいるのを眺めながら、いつも一人で離れたところにいる。（いつも一人でいるのを心配した）担任は、母親とマチルドを学校に呼び出すが、母親は呼び出された理由を忘れ、担任との話も噛み合わない。一方、マチルドは離婚して別居している父親とは、パソコンを使ってオンラインで話したりもする。

ある日母親は、カゴに入ったフクロウをマチルドにプレゼントする。このフクロウが、マチルドだけに人間の言葉で話しかけてくる。フクロウは、マチルドがベッドに寝転がっていると、体を温めるように言ったり、マチルドの母親はズレているとはっきり指摘したりもする。フクロウは、マチルドの話し相手となってマチルドを支える。

学校で合唱の発表会が開かれたとき、母親は参観にやってきて、マチルドが一番前に出てソロで歌い始めると、マチルドに駆け寄り抱き締める。寝たままで部屋から出てこないこともあり、マチルドは自分で食事を準備し、フクロウを話し相手に食事をする。またある日、マチルドは、母親に代わって買い出しに出かけて、母親と二人で食事をしようと調理する。ところが母親は、いつの間にか外出し、電車に乗って終着駅まで行ってしまう。マチルドは、待たされた挙句のあまりの出来事に、テーブルの上に並べていた皿を投げつ

け、怒りをぶちまけ、フクロウが止めるように言ってもカーテンにローソクで火をつけ、危うく火事になりかける。

やっと帰ってきた母親に命令して何かさせるという「命令ゲーム」をする。さらには、「いい母親になる」と母親に言わせて抱きつく。幸せだというマチルドに、フクロウは、マチルドは不幸であることに気づいてないだけで囚人同然だとさえ言い切る。

またある日、母親は、今すぐに引っ越ししなければならないと突然言い出し、二人は抱えられるだけの荷物を持って、引っ越しをする。ところが引っ越し先には住人がいて、引っ越しの予定は無いと、二人は雨の中を追い出されて元の家に戻る。心配した父親が自宅にやってくると、フクロウは、父親のことを、やっとまともな人がきたとマチルドに言う。母親は疲れ切った表情で、急に泣き出したりもするので入院することになり、マチルドは父親に引き取られることになる。

時がたち、少し大人になったマチルドは、母親が入院する病院へと出かけ病院の庭で花の手入れをする作業（療法）をしているところで再会する。母親が踊り出すと、（初めマチルドは母親を押しとどめようとするが）、二人は絡まり合うように雨の中で踊り出す。踊りが終わると、二人で詩作る。

５－３ 子どもには理解するのが難しい母親とその娘との関係

この映画に出てくる母親は、娘の学校の担任との会話もチグハグで、ふらりと出かけては道に迷って家に帰れなくなったり、娘の歌の発表会の最中に娘が歌っている舞台に突然上がったりもする。それでも、マチルドにとっては母親であり、母親は母親なりにマチルドに関わりを持ってもいる。けれど、子どもにとって、この母親のことを理解するのは難しい。この理解することの難しさ、苦しさは、家のものを投げ散らかし、カーテンに火をつける行動からも読み取ることができる。感情が爆発するほどの難しさなのである。それでも、「いい母親になる」と母親に言わせているように、マチルドはいい母親を母親に求めてもいる。この母親は、子どもからすると、何を考えて行動しているのかもわからなくて、自分を見てくれているのかもわからない、いわば「悪い母親」の一面もあり、極端にアンビバレントな感情を喚起する存在でもある。このアンビバレントな感情が、娘に苦しみをもたらしているといえる。

つまり、マチルドにとっての抱える環境は、明らかに抱えることに失敗している。この抱えることの失敗から、マチルドが自分自身を取り戻す役割を果たしているのが、母親からプレゼントされたフクロウで、唯一の話し相手でもある。このフクロウは、実在しているフクロウであるとともに、イマジナリー・コンパニオン（想像上の仲間）でもあるといえる。マチルドが困った時には知恵を貸してくれる、いわば安定感のある大人のような存在として描かれている。マチルドにとって一番必要なものを提供してくれる空想上の存在である。このような存在によって、環境の失敗がマチルドにもたらす困難を和らげ、学校生活をはじめとする日々の生活を何とか送ることを可能にしていると理解できる。

マチルドにとっては母親は大切な存在であるが、子どもが抱えるにはあまりに大きな困難さを抱えた母親でもあり、離婚して別居している父親や、医療機関という専門的な援助があって、娘も成長したのちになってやっと、母と改めて関わり合うことができる過程を一面では描いた映画だともいえる。言葉ではないダンスという身体的な関わりの後になって、「詩」という言葉を通しての関わりが可能となるような一面も描かれているが、これは、これまでのマチルドと母親の関わりを、象徴的な形で描いているともいえる。近づこうとしても、近づけず、近づいたかと思うと離れていき、けれど、一面では言葉で通じ合えるところもある。過去に得られなかったものは、何かで簡単に穴埋めできるものではないが、何が起きていたのかを理解することができれば、自分なりに心の中におさまりをつけていくことは可能であることを示した作品ともいえる。

さいごに：子どもと養育者の関係と抱える環境の機能

以上、５本の映画を通して、子どもと養育者の関係のありようと抱える環境について検討してきた。まず、『あの日のオルガン』では、戦時下という非常事態の状況においても、子たちの周囲にいる養育者や保育者が、子どもに必要な抱える環境を整えることができれば、子どもたちは安心して仲間と遊び、楽しむことができることを示した。しかしながら、疎開先での出来事を描いたものであり、空襲などが起きている街中の出来事でも現代の出来事でもない。さらに、『存在のない子供たち』では、社会的な状況が日本とは異なり混乱しているとはいえ、大人たちの養育機能の不全に対して、結果的には、子どもが養育者に異議申し

立てを司法の場で行うに至った過程について検討した。実際に日本ではこのような異議申し立てはないとしても、虐待的な環境を生きる子どもたちの気持ちとしては近い側面もあるものと理解できる。また、『リトル・ガール』では、自分自身の性別に違和感のある子どもが、家族の受け入れ、地域の親しい人々の受け入れによって抱える環境が機能し、自分が思う性別として生きることができるようになっていく過程について検討した。しかしながら、児玉（2021）が指摘しているように、この先の社会環境での受け入れは困難さが待ち構えていると考えられることから、より身近なところにある抱える環境が、一生涯に渡ってどのように機能していくのかを検討していくという課題が残っている。また、『真夜中の五分前』では、一卵性の双子の姉妹の幼児期の大人との関わりの中での出来事が、成人になってからも影響を与える可能性について検討した。しかしながら、青年期以降にはより一層自分自身としてどのように生きていくのか、という自分自身の動きもあることから、今回の映画に示された状況においての理解に留まった検討だといえる。さいごに取り上げた『マチルド、翼を広げ』では、母親自身が困難さを抱えていて、子どもが養育者の世話をしようと必死になったり、振り回されたりしながらも、母親を求める気持ちと、受け入れられない気持ちというアンビバレントな感情を折り合わせるために、子どもの内面から生み出され、フクロウという外的対象に重ね合わされたイマジナリー・コンパニオンが、子どもを支える対象として機能したことについて検討した。

以上のように、映画を素材として、子どもと養育者・保育者との関係と、その抱える環境の果たす機能やその機能不全、さらには、養育者に向ける気持ちを調整するための子どもの内的世界から生み出された対象の果たす機能について検討してきた。

ところで、児玉（2021）が、「私たちに課せられた責任」という言葉で表現しているのは、映画を観ることは、時に観客を単なる傍観者から、ある出来事の当事者にするということでもあり、映画批評の際に用いられるスクリーンの登場人物と「観客との共謀」とは異なる。「重層的な抱える環境」という表現で示したように、重層的な構造の中ではたとえ辺縁に位置するとしても、観客はこの環境の一部であり、この当事者性を問う機能を映画は担っていることになる。特に、筆者は、教育学部の教員であり、将来、幼児や児童や生徒を抱える環境を作る人たちを教育現場に送り出す役割を担っているのであり、なおさら当事者性が問われている。

文献

長谷綾子：児童自立支援施設にみる“抱える環境（Holding Environment）”の同心円二重構造について－反社会的問題で入所した児童とのプレイセラピーを通じて，松山東雲女子大学人文学部紀要，15，29-39，2007.

北山修：劇的な精神分析入門，みすず書房，2007.

児玉美月：映画に映される子供たちと、私たちに課せられた責任，『リトル・ガール』劇場用パンフレット，サンリスフィルム，9-11，2021.

厚生労働省：令和2年度　児童相談所での児童虐待相談対応件数，
https://www.mhlw.go.jp/content/000863297.pdf.　（2021年12月12日最終閲覧）

文部科学省：性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について，
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm.　（2021年12月12日最終閲覧）

文部科学省：性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け），
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf.（2021年12月12日最終閲覧）

Overmier,J.B & Seligman,M.E.P: Effects of Inescapable Shock upon Subsequent Escape and Avoidance Responding, *Journal of Comparative and Psychology*,63(1),28-33,1967.

特定非営利活動法人TENOHASHI：TENOHASI，会報誌第42号，2021.
https://www.tenohashi.org/wp-content/cploads/report/42.pdf.　（2021年12月10日発行版）

Winnicott: *The Maturational Processes and Facilitating Environment*, London: Hogarth Press Ltd.,1965. 牛島定信（訳）：情緒発達の精神分析理論，岩崎学術出版社，1977.

吉田敬子・森山成桝：南仏の児童思春期精神医学教室と開業臨床心理士の診療所を訪ねて，臨床精神医学，

第47巻，6号，719-726，2018.

映画関連資料

AGAT FILMS & CIE- ARTE France- Final Cut For real：『リトル・ガール』劇場版パンフレット、サンリスフィルム，2021.
『あの日のオルガン』製作委員会：『あの日のオルガン』劇場用パンフレット，株式会社キネマ旬報社，2019. “Five minutes to tomorrow” FILM PARTNERS：『真夜中の五分前』劇場版パンフレット，東映事業推部，2014.
『真夜中の五分前』公式サイト：https://www.toei.co.jp/movie/details/1204599_951.html. （2021年12月13日最終閲覧）
サンリス：『マチルド、翼を広げ』劇場用パンフレット，サンリス，2019.
『存在のない子供たち』公式サイト：http://sonzai-movie.jp（2021年12月12日最終閲覧）